

言語学、はじめの一步 (28)

- Q：前回から言語の歴史にテーマが移りました。
- A：はい。新語など最近の日本語にみられる変化について取り上げましたが、今回は日本語の誤用についてです。
- Q：最近の言葉の乱れなどはマスコミでもしばしば取り上げられますね。
- A：文化庁が毎年「国語に関する世論調査」というのを実施していて、その結果が公表されると大きく報道されます。
- Q：その報道で本来の正しい意味を知ることもあります。
- A：そうですね。自分がある表現を間違った意味で使っていたとしても、周囲の人がみな自分と同じ意味で使っていればそれが誤用だとは気付きませんか。
- Q：いちいち辞書で意味を確認することもありますし。
- A：私は大学院生の頃まで「姑息」と「灯台下暗し」の意味を完全に間違えていました。「姑息」は「姑息な手段」のような使い方をしますが、どのような意味でしょう？
- Q：「卑怯な手段」の意味で普段使っていますが。
- A：では「灯台下暗し」の「灯台」とは何のことだと思いますか？
- Q：それはもちろん港にある灯台のことだと思います。
- A：私も同じように思っていました。両方とも不正解です。「姑息」は「一時しのぎ」という意味で、「灯台下暗し」の「灯台」は時代劇に出てくる電気がない時代に室内照明用に油を灯すための台のことです。
- Q：それは知りませんでした。
- A：私も院生の頃にある高名な言語学者の先生の講演でこの二つの表現の正しい意味を知り、衝撃を受けました。ちなみにその先生は「灯台」は「燈台」と書くのが正しいと仰っていました。
- Q：しかしたとえ間違った意味で使っていても、多くの人がそのような使い方をすれば、それが次第に正しい意味として定着するのではないですか？
- A：はい。言葉はそのように変化します。たとえば「世間ずれ」という言葉は「世間を渡ってする賢くなっている」というのが正しい意味で、「世の中の考えから外れている」というのは誤った意味です。文化庁の調査では前者の正しい意味を知っている人の割合は平成16年度は51.4%でしたが、平成25年度には35.6%に下がっています。反対に後者の誤った意味で捉えている人の割合は32.4%から52.2%に増加しています。若い世代ほど誤用の割合が高くなっていますので、もしかしたら将来的には現在の正用法が廃れて、誤用法が定着するかもしれません。
- Q：そうすると辞書の定義も変わってくるわけですね。
- A：そうですね。例えば「惘然」の正しい意味は「茫然とするさま、ぼんやりするさま」ですが、現在では多くの人が「不機嫌なさま」という意味で使っていますよね。そのため辞書によっては「近年、俗にむっとする意にも使う」（『明鏡国語辞典（第二版）』）などの注釈を付けているものもあります。もちろん本来の意味しか記載していない辞書（例えば『広辞苑』（第六版））もあります。この辺は辞書編集者の判断によるところです。
- Q：では参考文献をお願いします。
- A：『日本人も悩む日本語—ことばの誤用はなぜ生まれるのか？—』、加藤重広著、朝日出版社(2014年)です。
- 今回の参考文献は朝日新書の1冊ですので、特別な知識は不要で、誰でも読むことが出来ます。内容的には普段何気なく使っている日本語が、実は本来の用法とは異なっているというものです。
- 本書では単に正解と不正解を提示するだけでなく、何故不正解が生まれるのか、本来不正解なのに多くの人が使うようになるかどうか、といった点にスポットを当てています。まえがきに書かれているように「一足飛びに答えに飛びつくようなやり方では見落としがちなところこそ、ことばの面白さがある…」ことを教えてください。本書で言葉の迷路に足を踏み入れてみませんか？
- 請求番号:810.4||Kat 資料ID:598087
- にゅうがく なおや
(福井工業大学准教授・英語学・英語史)
ふじい たつや (司書・課長補佐・アジア関係図書館)